

大学生における現代的恋愛の諸相(Ⅱ)－1990年代調査との比較－

渡 辺 裕 子

Ⅰ. 問題の社会的背景

筆者は駿河台大学学生を対象に、恋愛意識や行動に関する調査を1999年、及び2009年に実施した。調査の概要については次章で述べるが、本章ではそれに先立ち、この10年余りの間に若者の恋愛意識・行動に影響を及ぼしたり、または連動して生じたと考えられる社会事象について、整理をすることにしたい。以下では、第1に晩婚化・未婚化現象について、第2に移動体通信機器の普及について、そして第3に若者世代にみられる消費行動について述べる。

1. 晩婚化・未婚化の進行

少子化現象はこの10年間に一層進行した。その指標値の1つとされる合計特殊出生率については、1989年が1966年の丙午年の1.58を下回ったことから、「1.57ショック」と呼ばれた。しかし、1990年代にはまだ第2次ベビーブーム世代の出産による第3次ベビーブームの到来への期待もあり、政府はそれほど積極的な対策を講じてこなかった。少子化への介入策に転換したのは2003年頃以降といえるが、そのような姿勢に反して、合計特殊出生率は2005年には過去最低の1.25を記録したのである¹⁾。

少子化の進展は直接的には独身者の晩婚化・未婚化、及び、既婚者が持つ子ども数の減少によって生じる。廣島(2000)は出生率低下の要因を「結婚行動」と「夫婦の出生力の低下」に分け、全体を100%とした場合のそれぞれの寄与率を計算した²⁾。これによると、結婚行動が70%(その内訳は、未婚化=56%, 晩婚化=14%), 既婚者が持つ子供数の減少が30%(その内訳は、子供数の制限=25%, 子供を作る時期の先延ばし=5%)であった。このうち近年では、これまで安定的であった夫婦の出生力が、低下していることが報告されているもの³⁾、依然として独身者の結婚行動の影響力が大きい。

1940年に開始され、現在、国立社会保障・人口問題研究所によっておおむね5年に1回行われている『出生動向基本調査』は、1982年からは未婚化・晩婚化の実態を

捉える目的で、18歳以上50歳未満の独身男女も対象にしている。そして最新の第13回調査(2005年)によると、18～34歳未満の未婚者で「交際している異性はいない」は、男性が52.2%、女性が44.7%であった。とくに女性は第12回調査(2002年)の40.3%と比べて、4.4%の増加がみられる。そして「異性との交際の状況は低調なまま推移」と、記述されている⁴⁾。

晩婚化・未婚化現象の進展を裏づける形での言説も多い。恋愛行動は元来、不活発な層と積極的な層とに分かれがちな事象であるが、それでは積極的な層においては結婚行動が期待できるかという点、社会学者の見方は否定的である。山田(1996)は逆説的ではあるが、異性との出逢いが多いからこそ結婚の決断が難しくなる、という。出逢いの機会が多いと、「もっといい人がいるかもしれない」という心理が生じ、結婚の決断がしにくくなるのである⁵⁾。

さらに最近ではマーケティングなどの領域から、「草食系男子」という造語が誕生している。「草食系」という言葉は明確に定義されないままに様々な文脈で用いられているが、多くの場合、異性と全く無縁ではないにもかかわらず、恋愛に積極的でない男子を指している。そして高橋(2010)によれば、「草食系男子」という言説には誤解や偏見、過度の一般化、個人的願望などが少なからず含まれているものの、時系列データによる分析の結果からは、そのような男性の増加傾向はおおむね支持されるという⁶⁾。

2. 移動体通信機器の普及

この10年間で若者の生活に大きなインパクトを与えることとなった社会事象としては、情報化社会の進展があげられる。とくにコミュニケーション・ツールとしての携帯電話の利用機会が、格段に拡大した。後述する駿河台大学学生を対象とした調査⁷⁾では、1997年における携帯電話・PHSの所有率は54%であり、「持ちたい」は25%、「必要なし」は21%であった。また、携帯電話等を持つてはいるものの、全体としては利用頻度はそれほど高いとはいえず、着信専用や緊急連絡用として使っている学生が多かった。

しかし、通信機器は所有率が上昇すると、一方的コミュニケーションから双方向的コミュニケーションが可能になり、そこから得られる効用が加速度的に増していく。これにより携帯電話の所有率の増加は、異性との交際における親密化を促進することが予想される。「携帯メールのやりとりで夢中になっている男女は、告白以前に、告白を繰り返し確認し合っていることになる」⁸⁾。しかし、逆に返信の遅さは、

相手への無関心や消極性の表われと受けとめられ、親密な関係からの離脱も早める。このように携帯電話の使用は、親密な関係とそこからの離脱の両方を促進する結果、交際期間の短期化にも結びつくという⁹⁾。そのため携帯電話は交際の活発化とともに、他面ではライトな感覚の恋愛をもたらすことも考えられる。

3. 若者世代にみられる「嫌消費」の傾向

2009年11月に「車を買うなんてバカじゃないの」というオビが印象的な、松田(2009)の『「嫌消費」世代の研究－経済を揺るがす「欲しがらない」若者たち』が刊行された¹⁰⁾。「嫌消費」という語は現時点では新聞や用語事典などの活字メディアには登場していないが¹¹⁾、インターネットなどを中心に流通し始めている。

松田によれば、「嫌消費」とは収入に見合った消費をしない心理的な態度を指す。戦後の団塊の世代やこれに続く断層の世代・新人類世代が、持ち家や自家用車、グルメやブランド品などの購入への欲望に突き動かされてきたのに対して、20代後半を中心とする「バブル後世代」の消費態度は、預貯金を増やし、消費支出を減少させることである¹²⁾。しかしながら、すべての消費に対して同じ態度が取られるわけではない。商品群で見ると、「日常性」「必需性」「ローリスク性」をもつ品目への彼らの購買欲求は旺盛である。したがって、「ファッション」「食」そして「家具・インテリア」の「衣・食・住」への消費欲求は高い。一方で、比較的高額で失敗したときのダメージが大きい、車や海外旅行は控えられる¹³⁾。そしてこのような消費態度は、他の世代へも波及するとされる¹⁴⁾。

バブル期に青年時代を過ごした新人類世代では、デートや恋人へのプレゼントのために競って消費をした。また筆者のこれまでの調査でも、恋愛の相手がいる者といない者との間には消費行動に差が見いだされた¹⁵⁾。そこで「嫌消費」の傾向が「バブル後世代」の次の世代である現在の大学生にも広がりを見せているのか、また、それが恋愛行動にいかなる影響を与えているのかに、注目する必要がある。

Ⅱ. 本稿の課題と調査の概要

1. 駿大生の生活と文化に関する調査

筆者は「駿大生の生活と文化」と命名した調査を、1995年に初めて実施した。この調査は学生に学内で社会調査実習の機会を提供する目的で開始したものであるが、担当授業科目の変更や本学学生課による「学生生活基本調査」への相乗りなど実施形態の変更を経ながらも、2～3年に1回の頻度で行ってきた。その結果「駿大生の

生活と文化」に関する調査は、2009年で第7回を数えている¹⁶⁾。

第1回調査は学生調査員による任意抽出の面接調査法、第2回調査以降は筆者の授業を中心とした教室での集合調査法を採用している。調査対象者は本学学生全員からの無作為抽出ではないが、1年間のうち同時期にほぼ同様の形で同じ大学の学生を対象として実施した、定点観測調査といえる。したがって本調査から、学生の生活実態や意識・行動の時代による変化を、ある程度描くことができるであろう。

この調査では年次変化を捉えるための共通の質問項目とともに、各回ごとの異なるテーマに沿った質問が含まれている。テーマは学生の関心などにもとづき、消費生活、通信機器の利用、恋愛、就労、ボランティア活動などが選択されているが、今回の調査(以下、2009年調査とする)では1999年(第3回)調査に続き再度、「恋愛」とされた。なお、調査の実施時期はいずれも後期授業開始直後の10月である。

本稿では2009年調査の結果を中心としながら、可能な質問項目については過去の調査との比較を行うことにしたい。使用する調査データは表1の通りである。本学は男子学生の比率が高いことから、回答者数は各回ともに男子が約7割を占めている。女子のサンプル数が十分でないことから、女子についてのデータ解釈は若干控えめに行う必要がある。

表1 使用データにおける調査対象者の人数内訳

回	実施年	男性	女性	計	調査方法
第1回	1995	184 (68.9%)	83 (31.1%)	267 (100.0%)	個別面接調査
第2回	1997	284 (78.0%)	80 (22.0%)	364 (100.0%)	集合調査
第3回	1999	168 (76.4%)	52 (23.6%)	220 (100.0%)	集合調査
第7回	2009	138 (71.5%)	55 (28.5%)	193 (100.0%)	集合調査

2. 本稿の課題

(1) 恋愛への消極性

前章で述べたように近年、恋愛への消極性が社会的にも指摘されているが、この10年余りの間に、本調査でもこのような傾向が認められるようになったかを明らかにする。恋愛に縁がないわけではないにもかかわらず積極的でない「草食系の若者」は、増加しているのであろうか。また男女別にみた場合に、メディアなどで言われているような「草食男子-肉食女子」という構図が、事実として成り立っているのか。さらに、草食系学生のパーソナリティなるものが存在するのかについても、分析を試みる。

(2) 恋愛と結婚の関連

恋愛と結婚の関係については、日本においては第2次世界大戦後に今日的な恋愛結婚イデオロギーが確立され¹⁷⁾、統計上でも1960年代末に見合い結婚よりも恋愛結婚が多数を占めるようになった¹⁸⁾。また、恋愛をしている相手と結婚することが当然であり、そうしないことは相手に対して不誠実であると考えられた。しかしながら、1970年代以降になると、恋愛と結婚とは別であり、恋愛はそれ自体で楽しむことができるもの、という意識が次第に浸透した¹⁹⁾。さらに携帯メールの利用の増加などの結果、ライトな感覚の恋愛が増加し、恋愛と結婚の分離が一層進行することも考えられる。

一方で、未婚化現象の進行下で結婚を意識した活動の必要性なども逆に認識されるようになった。最近では先述の山田らにより、「婚活」という言葉も新たに作られている²⁰⁾。内閣府の18～24歳の青年を対象とした「世界青年意識調査」においても、「結婚しなくてもよい」という回答は第6回調査(1998年)の26.1%をピークに減少しつつあり、第8回調査(2007年)では19.9%となっている²¹⁾。

本調査の対象は果たして結婚をどの程度、意識しているのであろうか。また、結婚に関する意識を規定するものは何であろうか。社会人であるならば、結婚するには収入や正規雇用であるかなどの経済的条件や社会的地位などが重要である。しかし本調査では就職前の大学生であることから、以下では自己の恋愛行動と結婚志向との間にいかなる関連が見いだされるかに焦点を絞って、明らかにする。

(3) 学生生活における恋愛の位置づけ

1997年調査では恋人がいる者には、家庭で勉強をしない、授業への出席が悪い、長時間のアルバイトをしている、などの行動上の特徴がみられた。また、主要な小遣いの支出項目においても交際費の選択率が極めて高かった。このように、恋愛をしている者としていない者の学生生活のあり様の差異は明瞭であったが、今日、この傾向は変化しているのだろうか。

学生生活との関連が予想される要因として、第1に携帯電話・メールの使用は相手への拘束力を強める。そうであるとすれば、恋人がいる者は相手と一緒にいる時間だけでなく、そうでない時間も互いに束縛し合うであろう。第2に「嫌消費」の傾向が本調査対象にも波及しているとすれば、支出項目の一部が縮小される可能性がある。ただし、恋愛をしている者の消費欲求には変化はなく、恋愛をしていない者の消費だけを縮小させる、という仮説も考えられよう。そこで、恋人がいる者とい

ない者について、これらの項目における1997年調査の結果との比較を行うことにしたい。

Ⅲ. 恋愛への消極性

1. 恋人の有無

恋人がいるかについては2009年調査以前にも過去に3回質問がなされているため、表2ではこれまでの結果も合わせて示している。それによると2009年調査における恋人ありの比率は男子は32.6%で、これまでの変動の範囲内であった。これに対して女子は35.2%となり、低下が示された。さらに注目すべきであるのは、従来の本学での調査では一貫して男子よりも女子に恋人がいる者が多く、この傾向は日本性教育協会などの伝統的な青少年の全国調査^{2,2)}とも一致していた。しかしながら、今回はこの傾向が認められなかった点である。

表2 恋人ありの比率—男女別, 1995~2009年

調査年	1995	1997	1999	2009	参考(2005)*
男子	31.0	37.3	34.7	32.6	37.8
女子	45.8	55.0	48.1	35.2	45.0

*出所：日本性教育協会・第6回青少年の性行動調査
ただし、「つきあっている人」の比率

男性の方が恋愛における不活発層が多いことは、これまで当然と考えられてきた。なぜなら、男女共同参画が進んだ今日でも、恋愛や性行動において男性がイニシアチブを取るという傾向には、時代変化がほとんど生じていないためである^{2,3)}。すなわち女性の場合には、恋愛に消極的であっても相手側からアプローチされて交際を開始することがあるのに対して、消極的な男性はそのまま取り残される。結果として、恋愛におけるイニシアチブの非対称性が、「恋人あり」の比率に男女差をもたらすのである。

それでは本調査では、男子が交際を申し込むことに消極的になった結果として、つまり男子の側の変化によって、女子に恋人がいない者が増加しているという解釈が成り立つであろうか。1999年調査及び2009年調査では、恋人の有無についての質問は二者択一ではなく、「1. いない, 2. いないので欲しい, 3. いないが欲しいとは思わない」の3つの選択肢を提示している。恋人が「いないが欲しいとは思わない」は、男子は1999年が17%, 2009年が22%と大きな変化がないのに対して、女子では27%から39%へと大幅に増加している。つまり、女子の側が交際自体に無関心にな

ってきていると考えられる。

2. 「草食系男子－肉食系女子」の構図

マスメディアでは草食系男子と対比させる形で、女性を肉食系女子という構図で捉えることも少なくない。前節の結果から推し量っても、女性が異性に対して積極的になっているとは考えがたいが、本調査では恋人がいる場合に「デートに誘うのはどちらか」という質問をしている。それによると、男女とも「どちらともいえない」が過半数を占めていた。しかし、「主に自分」と回答したのは男子が32%であるのに対して、女子は15%であった。異性との交際を主導する「肉食系女子」のイメージと合致する結果は、得られなかった。

ところで先に述べたように「草食系」は恋人の有無ではなく、異性と無縁ではないにもかかわらず恋人のようなステディな相手を欲しない者を、意味している。それでは、草食系はとりわけ男子に多いのであろうか。図1は恋人以外の「グループでつきあう異性」「親友とよべる異性」についても、「1. いない、2. いないので欲しい、3. いないが欲しいとは思わない」の回答を男女別に示した結果である。

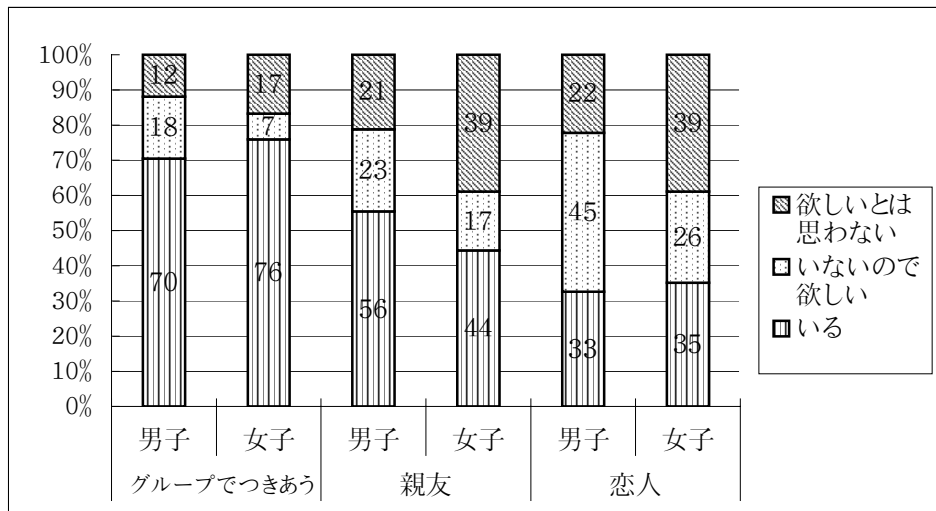


図1 異性の友人や恋人の有無－男女別

これによると、恋人ではないけれど「親友とよべる異性」がいるのは、男子が56%、女子が44%で、確かに男子の方が多。しかし、ここでは「恋人」「親友とよべる異性」「グループでつきあう異性」の3つの質問を組み合わせると、その回答パターンの

うち「グループでつきあう異性や異性の親友はいるけれども、恋人は欲しいと思わない」者を、「草食系」と操作的に定義してみた。その結果、草食系に該当するのは男子では 15%、女子では26%となった。草食系は男子に多いとはいえず、むしろ女子に多い異性とのつきあい方なのである。

3. 草食系のパーソナリティ

(1) 自分自身に対する評価

2009年調査では、自己評価に関するいくつかの質問を行っている。図2は自分の性格特性として「努力家である」「頭が良い」「スポーツが得意」「同性に好かれる」「異性に好かれる」がどの程度あてはまるかについて、回答を「あてまはる(3点)ーややあてはまる(2点)ーあまりあてはまらない(1点)ーあてはまらない(0点)」で得点化し、平均点を求めた結果である。「スポーツが得意」などの自己評価には性差が生じるため、男女別に全体平均、恋人ありのグループ、草食系のグループの得点を示している。

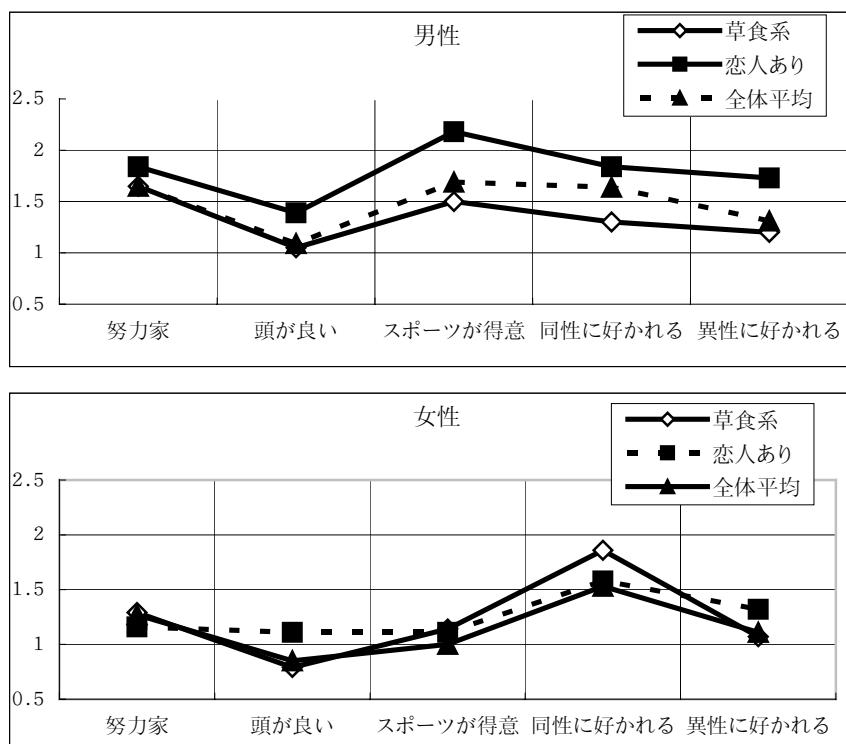


図2 男女別の「草食系」のパーソナリティー全体平均、恋人ありとの比較ーこれによると女子の場合には、全体平均とグループ別平均の間に際立った差は認

められない。一方、男子の場合には、恋人ありのグループは一貫して自己肯定的であるのに対して、草食系のグループは評価が全体平均と同程度か、もしくはやや低くなっている。このように、明瞭な草食系のパーソナリティは見いだすことができない。

ただし男子においては、恋人がいる者は自己評価が高い。本調査からはさらにその因果関係の分析に進むことはできないが、セルフ・エスティームと性・恋愛行動の関連に関する従来の研究においても、相関が見いだされるものとそうでないものがあり、結果は一様ではない^{2.4)}。しかし、最近の研究として塩谷(2010)によれば、男性は自己評価が高いと異性に対しても積極的になるという。これに対して女性の場合には、交際において受け身の立場であることが多いため、自己評価の差による行動の差は生じない、と解釈されている^{2.5)}。

(2) 性役割分業に対する態度

マスメディアなどにおいては、「草食系男子」がいかなるパーソナリティの持ち主であるかについて、語られることが多い。その中で好ましい特徴として、ある種の期待も込めて、男女平等主義者であることや家族を大切にすることなどが、しばしばあげられる。

本調査では「男は外で働き、女は家庭を守るべき」という意見の是非について尋ねているが、「そうは思わない」と否定的な態度を示したのは、男子全体で39%ではあるのに対して、草食系男子では64%であった。また女子も全体では33%であるのに対して、草食系女子では53%であった。本調査においても草食系は、伝統的なあるべき男性像・女性像に縛られないタイプといえる。

IV. 恋愛と結婚の関係

1. 結婚の可能性

恋愛と結婚の関連を問う質問は2009年調査で新たに追加した。そのため、以前の結果との比較はできないのであるが、恋愛と結婚は別という考え方は多数派といえるであろうか。ちなみに日本性教育協会による第5回青少年の性行動全国調査(1999年実施)では、「結婚してもよい相手がいても、早く結婚する必要はない」という意見の賛否を尋ねている。「そう思うーどちらかといえばそう思うーどちらかといえばそうは思わないーそうは思わない」に「わからない」を加えて回答を求めたところ、「そう思う+どちらかといえばそう思う」は、大学生男子で60.1%、女子で70.1%

と多数を占めた²⁶⁾。また第6回の同調査(2005年実施)では、「好きな人がいても、早く結婚する必要がない」とワーディングが多少変更されておりその影響も無視できないが、「そう思う+どちらかといえばそう思う」の合計は、大学生男子で81.0%、女子で91.1%と、一層増加している²⁷⁾。

(1) 現在の相手との可能性

図3は現在恋人がいる者を対象に、相手との交際期間別に結婚の可能性について尋ねた結果である。「可能性はある—どちらともいえない—可能性は低い」の中から自分の考えに最も近いものを選んでもらったところ、交際期間の長さで結婚の可能性との間に明瞭な関連が見いだされた。すなわち「可能性はある」とする回答は、交際期間が3か月未満の場合では31%であるが、6か月以上1年未満では半数となる。さらに1年以上2年未満の場合には64%、2年以上では75%とかなり多数になる。

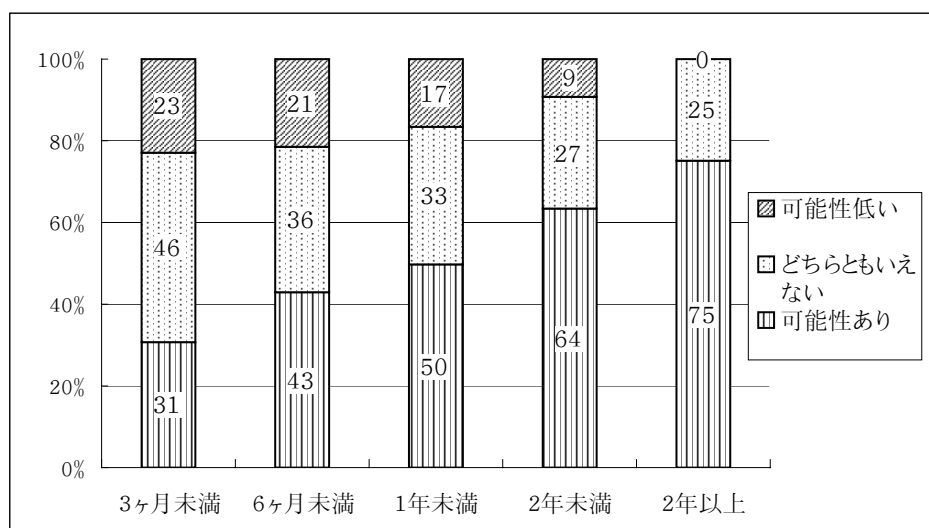


図3 現在の恋人との結婚の可能性—交際期間別—

ところで実際の交際はどの程度の期間であるかをみると、図4に示すように学年によって違いがある。本調査が実施された10月時点では1年生の場合には交際期間が3か月以上6か月未満が最も多く34%を占め、1年以上に及ぶ者は22%と少ない。これに対して2年生以上では、交際期間2年以上が36%と最も多く、1年以上も合わせると61%となる。これは大学入学後に現在のつきあいを開始したケースが、多

数であるためと考えられる。交際期間の短期化傾向が生じているかについては、以前の調査に比較の質問項目がないため検証できない。しかし、少なくとも図4からはそれほど期間が短いとはいえない。

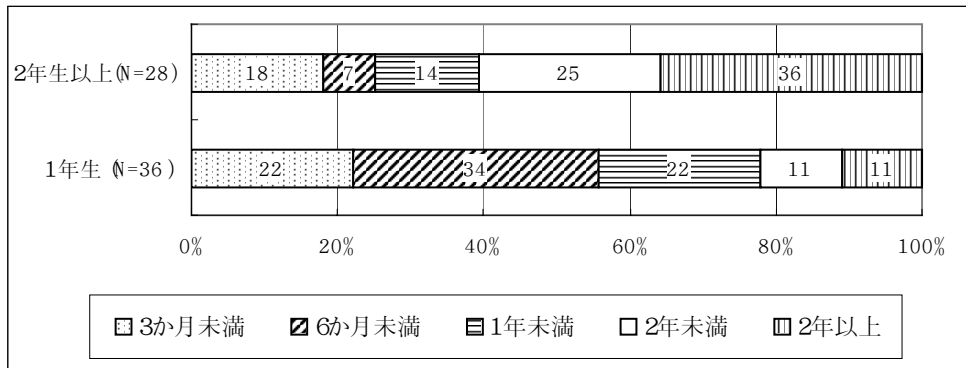


図4 現在の恋人との交際期間－学年の別－

そして先に示した日本性教育協会の全国調査の結果とは異なり、本調査の対象者は将来の結婚も意識しながらつきあっているように思われる。これはインパーソナルな規範意識を尋ねる質問とパーソナルな問題として尋ねた質問との形式の違いが、回答に影響を与えている可能性もある。しかし、世間で信じられているように、必ずしも若者が「恋愛と結婚は別」と考えているわけではないといえる。

(2) 現在、25歳時点、30歳時点における可能性

本調査では現在だけでなく25歳時点・30歳時点についても、結婚の「可能性がある－可能性は低い」の二者択一で回答を求めている。図5をみると結婚の可能性が低いとする回答は、男子では現時点で83%、25歳時点で55%、30歳時点で22%である。女子では現時点で85%、25歳時点で62%、30歳時点で25%である。

また可能性は低いと回答した場合、さらに未婚の理由を尋ねている。表現の簡略さを優先して、図5では「適当な相手がいない」「出会えそうにない」「結婚できる条件が整いそうにない」などのできない理由と、「相手が必要とは思わない」「まだ結婚したいという気持ちになれない」などのしたくない理由とに、大きく2つに分けて示している。これによると現時点では性差があり、男子では「できない」が、女子では「したくない」が多い。つまり男子は経済的に結婚をすることができないという理由に、女子はまだ若いため結婚したくないという理由によっている。し

かし、その後は女子においても、「したくない」よりも「できない」が多くなるのである。自己のライフステージにおいて未婚でいたいとの考えは、男女とも25歳時点ですぐに2割程度以下、30歳時点では1割以下であり、予想よりも比率が低いといえる。

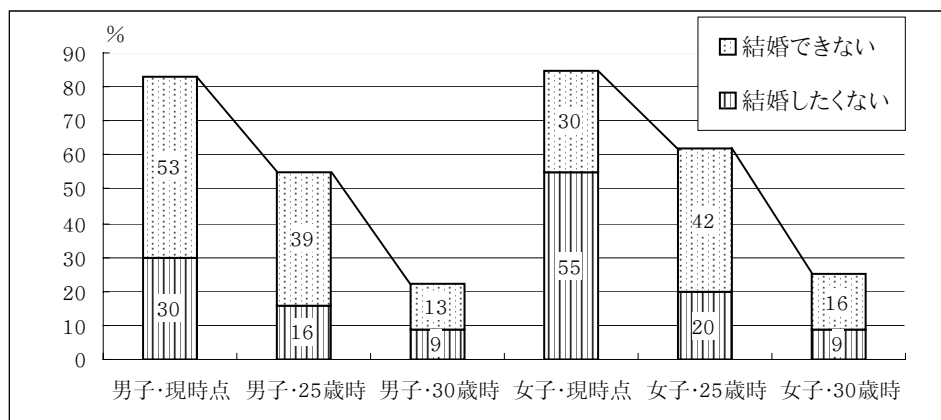


図5 将来の理由別の未婚の可能性—男女別・年齢時別

2. 結婚の可能性があると考える者と低いと考える者の違い

結婚できないと考える理由は、現時点での男子のみ「結婚する条件が整いそうにない」が多いものの、男子のそれ以降の年齢時や女子の回答では「適当な相手に出会えそうにない」ことが多数を占めていた。それでは結婚の可能性についての判断は、何に規定されているのであろうか。

以下では、可能性があると考える者と低いと考える者を区別する変数を見いだすために、判別分析を試みた。判別関数の被説明変数は、「25歳時点での結婚の可能性」及び「30歳時点での結婚の可能性」の2通りとした。説明変数は、交際の状況に関する「過去の恋人の人数」と「現在の恋人の有無」の2つの変数、及び第Ⅲ章でも用いた自己評価に関する5つの変数の、計7つである。

表3は男女別に行った判別分析の結果の要約である。7つの変数からなる判別関数のモデルは、男子の25歳時点、及び30歳時点での結婚可能性については統計的に有意であった。一方、女子では25歳時点での結婚可能性についてのみ、統計的に有意であった。有意となった判別関数による回答ケースの判別率は84%~76%であったが、有意でない女子の30歳時点での結婚可能性については69%と判別力が低かった。

標準化された判別関数係数の絶対値の大きさをみると、男子では25歳時点での結婚の見通しを左右するものは、第1に「過去の恋人の人数」、第2に「現在の恋人の

有無」,そして第3に「異性に好かれる(自己評価)」ということである。しかし,30歳時点での可能性になると「現在の恋人の有無」や「異性に好かれる(自己評価)」などの変数は判別力が低くなり,代わりに「同性に好かれる(自己評価)」ことや「努力家(自己評価)」であることの重要性が増す。

女子でも25歳時点での結婚の可能性については,同様に実際の交際の状況に関する2つの変数の判別力が強いが,2番目に高いのは「同性に好かれる(自己評価)」ことである。しかし,男子のように「努力家(自己評価)」であることは重要と考えられていない。

以上のように男女で共通するのは,現在またはこれまでの交際経験によって将来の自分の結婚可能性が推測されている点である。それに加えて同性に好かれること,つまり人柄が良いことが重要とされている。また男子では女子と異なり,30歳時点では真面目に努力するなどの要素も重要と考えられるようになるが,他方で「頭が良い(自己評価)」ことや「スポーツが得意(自己評価)」などとの関連は見いだされなかった。

表3 結婚の可能性：判別分析の結果要約表

		男子 (N=122)		女子 (N=49)		
		25歳時点	30歳時点	25歳時点	30歳時点	
標準化 判別 関数 係数 (絶対値)	過去の恋人の人数	①0.775	①0.695	③0.306	①0.694	
	現在の恋人の有無	②0.338	0.011	①0.608	③0.394	
	自己 評価	異性に好かれる	③0.207	0.015	0.073	0.368
		同性に好かれる	0.065	②0.408	②0.561	②0.575
		スポーツが得意	0.055	0.029	0.299	0.170
		努力家	0.051	③0.378	0.101	0.123
	頭が良い	0.044	0.022	0.156	0.042	
関数の検定(Wilksのラムダ)		0.598	0.734	0.611	0.762	
有意確率		0.000	0.000	0.003	0.115	
判別の結果(判別率)		79.5%	75.9%	83.7%	68.8%	

注：①, ②, ③は判別関数係数(絶対値)の大きさの順位

このように、結婚の条件として自己の能力の高低はあまり重要と考えられていない。また、日本人の30～34歳の未婚率(2005年)が男性47.1%、女性32.0%と晩婚化が進んでいる現実を考えると²⁸⁾、かなり楽観的な見通しであるともいえる。社会学の社会階層論では階層的同類婚や女性における上昇婚などが指摘されるが、本調査の結果はそのような議論とはかなりギャップがある。

V. 大学生活における恋愛の位置づけ

1. 学業と恋愛との関係

大学生活に関して、授業への出席状況、1日の家庭での勉強時間、週あたりのアルバイト時間は、「駿大生の生活と文化に関する調査」における共通の質問項目となっており、第1回～第7回の年次推移を捉えることができる。ここではこれらの質問を用いて、恋人がいる者といない者を比較した場合に、どのような生活上の違いがあるのかを分析することにしたい。

(1) 授業への出席

男子は女子と比べて授業への出席が良好でないことが、これまでの調査で一貫して示されてきた。そこで男女別に授業の出席に差があるかをみると(図6)、2009年調査では「殆ど毎回」出席しているのは、男子の場合、恋人がいる者は70%、いない者は69%であり、恋人の有無による差はない。一方、女子の場合には、恋人がいない者は77%であるのに対して、恋人がいる者は68%となる。つまり恋人がいると、男子と同程度に出席率が低下するのである。

本調査では恋人と知り合った場所を尋ねているが、男女ともに「学校」が最も多い。本学は男子学生の比率が高いため男子の場合には学外で相手を得ることも少なくないが、女子の場合には67%が大学で知り合っている。学内で恋人である男女が対となって行動した結果、女子の側が男子の行動に影響を受けたものと考えられる。

このような傾向は1997年調査にもみられた。しかし2009年調査ではさらに、恋人のいる女子の出席状況は男子全体のそれにより一致している。1つの原因として、携帯メールなどの利用により、恋人どうしの男女の同伴行動がさらに増したことが考えられよう。

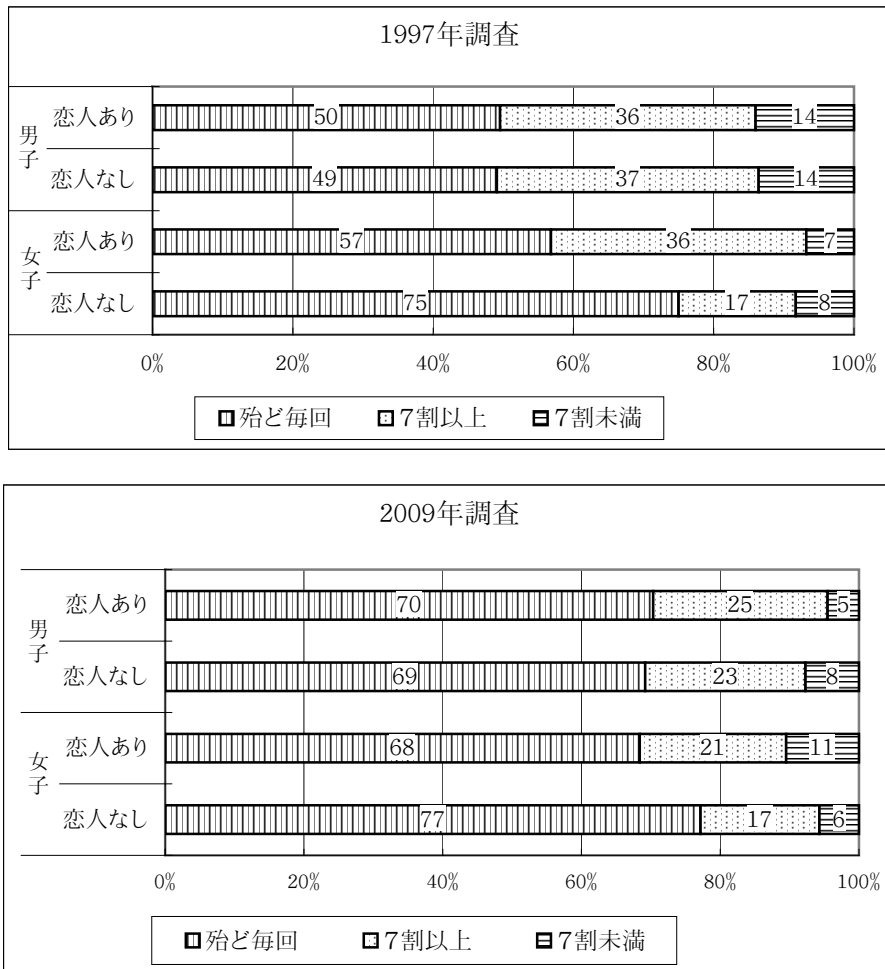


図6 男女別、恋人の有無別の授業への出席率－1997年調査と2009年調査－

ただし、本学では出席重視の科目が増えたため、全体の出席率が上昇している²⁹⁾。そのため、授業への出席に関する限りでは、恋人の有無による差は以前よりも縮小している。

(2) 家庭での勉強時間

恋人の有無による差が2009年調査において際立って現れたのが、1日あたりの家庭での勉強時間である(図7)。1997年調査においても、恋人がいない者の方がいる者よりも勉強をしていたのであるが、恋人の有無にかかわらず、一般的に男子より女子の方が勉強時間が長かった。そのため勉強時間の長さは、恋人がいない女子>

恋人がいる女子>恋人がいない男子>恋人がいる男子, の順であった。

これに対して2009年調査では, 勉強時間を基本的に規定する変数が性別から恋人の有無に変化している。つまり勉強時間の多い少ないは性差によらず, 恋人がいる者>恋人がいない者, という関係で捉えられるようになった。勉強時間が「0分」である, つまり家庭で全く勉強をしない者は, 恋人がいない男子では47%, 女子では46%と約半数であるのに対して, 恋人がいる男子では65%, 女子では73%と7割前後に上っている。とくに恋人のいる女子は, 以前よりも学生生活における恋愛交際の位置づけが大きくなっているものと考えられる。

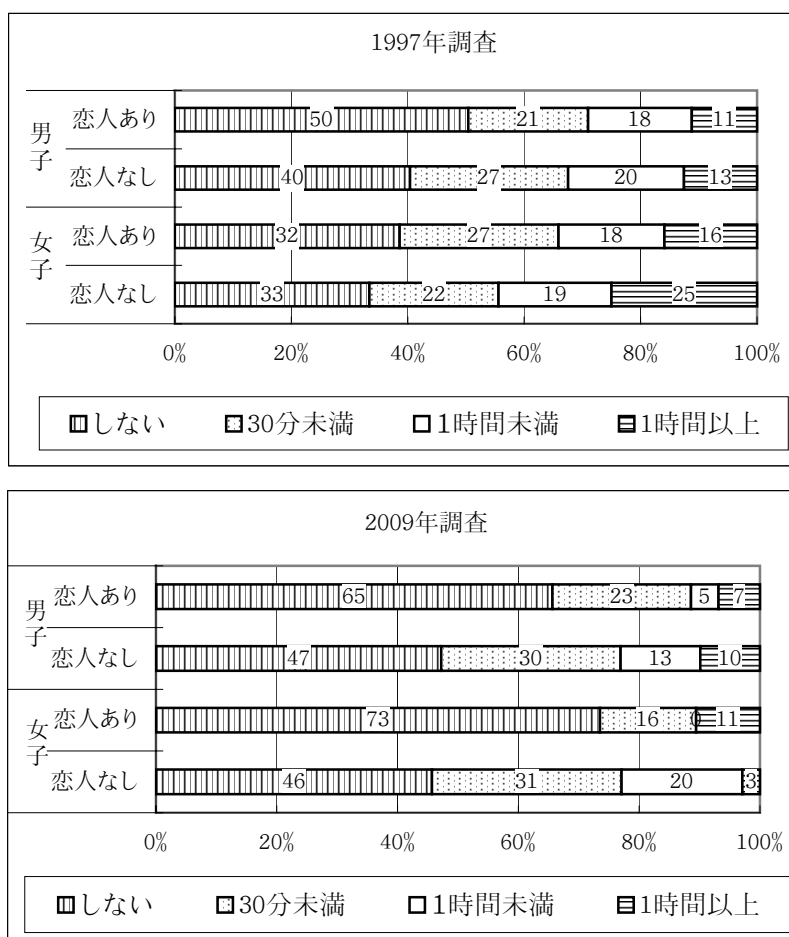


図7 男女別, 恋人の有無別の1日あたりの家庭での勉強時間
—1997年調査と2009年調査—

2. 勉強時間が短くなる原因

1997年調査と比べて2009年調査では授業への出席率が高いものの、家庭での勉強時間は逆に少なくなっている。この原因はそれ自体で分析が必要な重大な問題ではあるが、ここでは本稿の課題に従い、学生生活における恋愛との関係で検討する。

勉強時間が短くなる原因としては、2通りの解釈が考えられる。1つは、恋人と過ごす時間や交際費などを稼ぐためのアルバイト時間が物理的に増えることによって、勉強時間が不足するという解釈(以下「時間配分仮説」とよぶ)である。もう1つは、恋愛が生活の中心になっているがゆえに、学業など他の生活や目標が軽視されるという解釈(以下「学業軽視仮説」とよぶ)である。

(1) アルバイト時間

図8は週あたりのアルバイト時間を男女別・恋人の有無別に示したものである。これによると1997年調査では、恋人がいる者の方がいない者よりも長時間のアルバイトをしていた。しかし恋人の有無にかかわらず、一般的に男子の方が女子よりもアルバイトをしており、その時間の長さは、恋人のいる男子>恋人のいない男子>恋人のいる女子>恋人のいない女子>の順であった。ところが2009年調査では家庭での勉強時間と同様に、アルバイト時間の長さにおける性差は消失した。それは、全体として男子の場合にはアルバイト時間が短縮され、女子の場合には長時間化された結果である。

ただし男女ともに、恋人のいる者はいない者に比べて、アルバイトを全く「していない」という回答が少ない。これは、アルバイト先で相手と知り合う機会が多いこととも関係していると思われる。つまり、アルバイトは恋人がいることの結果というよりも、恋人を得るきっかけとなった可能性がある。また、恋人がいない者よりもいる者の方が長時間のアルバイトをしているのは男子のみである。したがって、恋人がいると家庭での勉強時間が短くなるという関連に対して「時間配分仮説」が妥当するのは、男子の方であるといえよう。女子においては他の説明が必要となる。

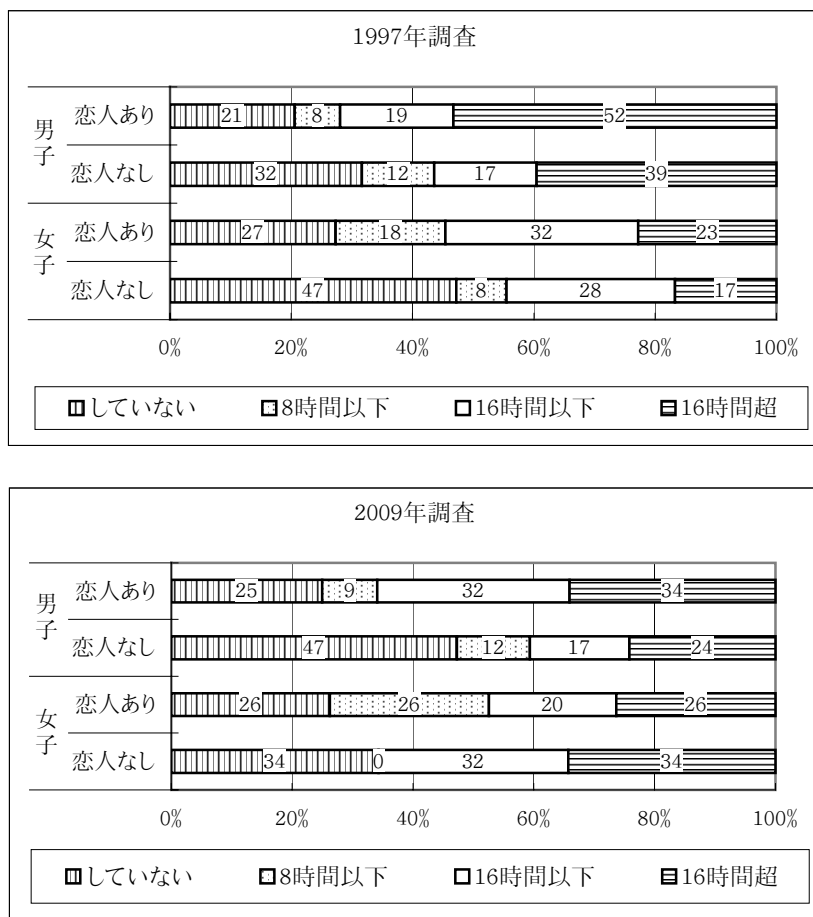


図8 男女別、恋人の有無別の週あたりのアルバイト時間
—1997年調査と2009年調査—

(2) 就職の準備

2009年調査では就職についてどの程度準備をしているかについて質問している。回答の選択肢は「1. なりたい職業があり、準備や努力をしている。 2. なりたい職業があるが、とくに準備や努力はしていない。 3. 就職についてはまだ考えていない」の3つである。図9は男女別、恋人の有無別に回答を示している。

これによると「なりたい職業があり、準備や努力をしている」という回答は、男子や恋人のいない女子が24～28%であるのと比べて、恋人がいる女子では11%と際だって低い。逆に「就職についてはまだ考えていない」という回答は、恋人がいる女子では47%で、他の3グループが38～40%であるのと比べて多くなっている。

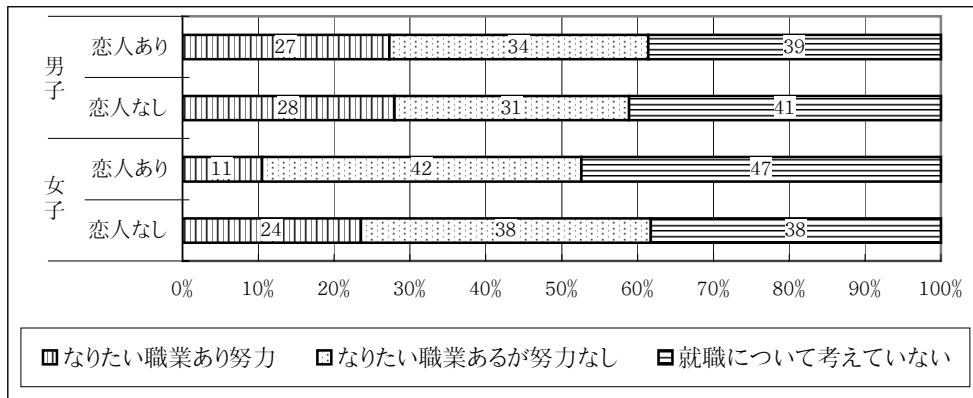


図9 男女別、恋人の有無別の就職のための準備状況
－1997年調査と2009年調査－

つまり男子の場合には、将来の就職の準備をしているかどうかは、恋人の存在の影響を受けてはいない。一方、女子の場合には恋人がいると恋愛に夢中になり、それにエネルギーを費やしがちになるという「学業軽視仮説」が、妥当となる可能性がある。

(3) 通信機器の普及の影響を受けたのは男女どちらか

恋愛における行動や意識の性差を取り上げた研究は多い。そして一般的に、男子青年ではそれによって自己評価を高めるなど、プラス面が認められる結果が多いのに対して、女子青年では社会的不適応への代償行動などマイナス面が指摘されることが多い³⁰⁾。本調査でもこれと整合的な結果が得られたといえる。

また家庭での勉強時間の減少の理由が、男子の場合には「時間配分仮説」、女子の場合には「学業軽視仮説」によって説明できるとした場合、今日の通信機器の普及の影響を受けているのはどちらであろうか。「時間配分仮説」はある生活時間が増加する場合に他の生活時間がそれに置き換えられて減少するという、普遍的なロジックである。これに対して「学業軽視仮説」は、ここでは携帯電話・メールの頻繁な利用による交際の親密化が、媒介変数の1つとして想定される。つまり、より大きな影響を受けたのは女子であると考えられよう。

3. 小遣いの使途からみる消費行動の特徴

最後に小遣いの使途から、恋人のいる者といない者の消費行動の違いについて考

察することにした。図10は小遣いの使途として8つの費目の中から多いものを3つまで選択してもらった結果である。1997年調査と2009年調査では8つの費目のうち6つが同じである。ただし、1997年調査では「サークル活動費」を選択する者が限られていたため、2009年調査ではこれを削除し、「その他」の自由回答欄に比較的多く記述のあった「生活費・貯金」に差し替えた。また1997年調査では「CD・ビデオ」としていた趣味の領域の支出は、より一般的な「趣味」に改めた。

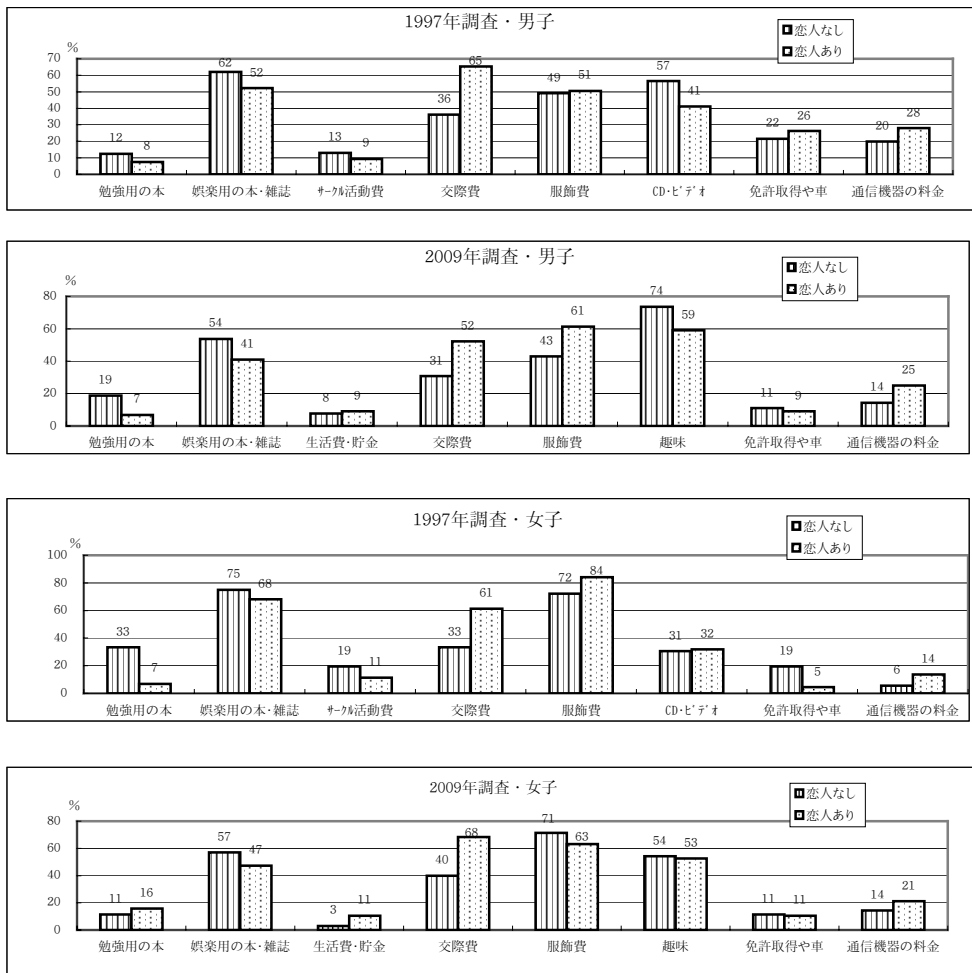


図10 男女別、恋人の有無別の小遣いの使途（多いものを3つまで選択）
 —1997年調査と2009年調査—

(1) 恋人がいる者といない者の違い

先ず第1に調査時点・性別を問わず、恋人がいる者はいない者に比べて「交際費」の選択率が高い。また金額的にそれほど高額とはいえないため選択の上位には上らないものの、「通信機器の料金」が相対的に多い。回答方法として選択数が3つまでと制限されているため、恋人のいる者では逆に少なくなっているのが、「娯楽用の本・雑誌」である。

(2) 男子にみられる特徴

本調査ではデート費用をどちらが払うかを尋ねている。「1. 主に自分, 2. 主に相手, 3. どちらともいえない」の回答のうちでは、「どちらともいえない」が男子で64%, 女子で50%と、男女ともに最も多い。しかし、「主に自分」という回答は女子には全くなかったが、男子では34%に上っている。交際費は男子が多く負担している場合が少なからずあり、他の支出に影響が出るものと考えられる。そして図10からも、恋人がいる男子の場合に恋人がいる女子には現れない特徴として、「CD・ビデオ／趣味」などの娯楽のための出費が控えられていることがみてとれる。

ただし、費目の順位・選択率などには時代の変化がみられる。バブル後世代以降はデートには以前ほど贅沢にお金を使わなくなったと言われているが、1997年では恋人のいる男子では「交際費」は第1位(65%)であったが、2009年では第3位(52%)へと後退した。代わりに、「服飾費」(3位から1位へ)や「趣味」(4位から2位へ)など自分のための出費が上位になっている。また男子は恋人の有無にかかわらず、「免許取得や車の購入」などが低下している。恋人のいる者に、車＝デートの必需品、とは認識されておらず、全体的に以前ほど若者が車に関心を示さなくなったと考えられる。このような消費行動の変化が、男子におけるアルバイトの必要性を低下させ、アルバイト時間の減少の一因になったと考えられよう。

(3) 女子にみられる特徴

恋人がいる者といない者の支出の差は、女子の場合には男子と比べれば小さい。しかし調査時点による変化に注目すると、1997年では恋人ありの女子では「服飾費」が第1位(84%)であり、恋人なしの女子と比べてファッションへの高い関心が示されていた。しかし、2009年では第2位となり選択率も63%と低下し、恋人なしの場合(第1位で71%)をも下回った。恋人がいると服飾費の支出が多くなるという傾向が、消失している。とはいえ、男子における自家用車への関心の低下といったよう

な「嫌消費」言説と整合的な結果は、女子には見いだされないと見える。

VI. おわりに

本稿では恋愛の普遍的な面よりも、社会と連動しながら変化していく恋愛の現代的諸相を、大学生を対象として捉えることを目的とした。この10年余りの間に見出された特徴は次のようなものである。

第1に、社会的に晩婚化現象はさらに進行したが、本調査対象においても恋愛への積極性の低下が示された。ただし、マスメディアで言われているような「草食系男子」の増殖という形ではなく、むしろ女子の方に恋愛領域からの退却が認められた。

しかし、第2にそのことと結婚を否定していることは同じではない。現在の交際相手との恋愛の延長上に結婚があることを、意識していた。また大半の者が、いわゆる適齢期に結婚するという規範的な自己の将来像を描いていた。

第3に恋愛の学生生活の影響については、女子の側にマイナス面が一層増大していた。恋人のいる女子は学業態度が良好でなく、将来の目標も明確でない。本調査では携帯電話やメールなどの使用に関する質問項目がなくデータによる直接的な検証はできないが、これらのコミュニケーション・ツールが関係の親密化や拘束をもたらしている可能性がある。しかし他方で、言われているような携帯メールの利用場面の増加が交際期間の短縮化をもたらす可能性は、本調査では示唆されなかった。

大学生の恋愛行動は今後どのような方向に向かうのであろうか。今のところ、草食系と定義されるような異性とのつきあい方は一般化していない。筆者は1999年調査をもとにした論文の中で、恋人は不要であるが異性の親友が存在するタイプの増加を予見したのであるが、的中しなかった³¹⁾。むしろ、恋愛に没頭する者と回避する者との二極化、という図式が描かれたといえる。その場合、とくに恋愛に没頭する女子学生において、生活へのマイナス面が一層際だってきていることが問題となる。また、恋愛を渴望しているわけではなく、恋愛＝結婚という通過儀礼をクリアするための規範的行動、として捉えている学生が、果たして結婚にたどりつくのかという問題もあろう。

しかし、恋愛や結婚は極めて私的な領域である。「正しい」恋愛交際を指導することも、他方で哲学や文学で示されるような恋愛至上主義的な価値を説くことも、大学という教育の場では相応しくない。したがって、いかなる方法で適切といえる社

会化モデルを提示できるかが、社会的に重要な問題となる。

註

- 1) 政府の少子化対策については、増田(2008)に詳しい。増田雅暢(2008)『これでもいいのか少子化対策－政策過程からみる今後の課題－』ミネルヴァ書房,を参照。
- 2) 廣島清志(2000)「近年の合計特殊出生率の要因分解－夫婦出生率は寄与していないか?」『人口学研究』26, pp. 1-19。
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ(2006.9)「第13回出生動向基本調査(結婚と出産に関する調査－夫婦調査の結果概要－)」<<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13/doukou13.pdf>>, 2010年1月4日参照。
- 4) 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ(2006.9)「第13回出生動向基本調査(結婚と出産に関する調査－独身者調査の結果概要－)」<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13_s/chapter2.html>, 2010年1月4日参照。
- 5) 山田昌弘(1996)『結婚の社会学－未婚化・晩婚化はつづくのか』丸善ライブラリー, pp. 140-144。
- 6) 高橋征仁(2010)「統計でみる<草食系男子>の虚実－欲望の時代からリスクの時代へ」『現代性教育研究月報』28(1), pp. 1-7。
- 7) 渡辺裕子(1998)「移動体通信機器の普及と大学生のライフスタイル」『駿河台大学論叢』16, pp. 142-143。
- 8) 高橋征仁(2007)「コミュニケーション・メディアと性行動における青少年層の分極化」日本性教育協会編『「若者の性」白書－第6回青少年の性行動全国調査報告－』小学館, p. 75。
- 9) 高橋(2007), 前掲論文, pp. 74-75。
- 10) 松田久一(2009)『「嫌消費」世代の研究－経済を揺るがす「欲しがらない」若者たち』東洋経済新報社。
- 11) 2010年8月19日時点で、『聞蔵Ⅱビジュアル』(1945年以降の「朝日新聞」「週刊朝日」「AERA」「人物データベース」の記事検索・全文情報データベース), 及び『日経テレコン』(1981年以降の「日本経済」「日経産業」「日経MJ」等)の記事検索・全文情報データベース, 及び『ジャパンナレッジ(Japan Knowledge)](「情報・知識 imidas」「現代用語の基礎知識」など約30種類の辞書・事典を収録した知識検索サイト)で「嫌消費」で検索してみたが、ヒットしたのは0件であった。
- 12) 松田, 前掲書, pp. 12-15。

- 13) 松田, 前掲書, pp. 178-180。
- 14) 松田, 前掲書, p. 32。
- 15) 渡辺裕子(1997)「消費社会と大学生のライフスタイル」『駿河台大学論叢』14, pp. 85-108。
- 16) これまでの「駿大生の生活と文化に関する調査」にもとづく論文は以下の通りである。渡辺(1997), 前掲論文; 渡辺(1998), 前掲論文, pp. 131-154; 渡辺裕子(2000)「大学生における現代的恋愛の諸相」『駿河台大学論叢』20, pp. 155-179; 渡辺裕子(2002)「大学生におけるフリーター志向とその形成メカニズム」『駿河台大学論叢』24, pp. 83-104; 渡辺裕子(2004)「駿河台大学におけるボランティア活動—学生のライフスタイル, 及び学内の支援体制との関連において—」『駿河台大学論叢』29, pp. 113-135; 渡辺裕子(2006)「施設・設備の利用からみた駿河台大学学生のキャンパス生活」『駿河台大学論叢』32, pp. 67-89。
- 17) 恋愛結婚イデオロギーの近現代史については, 羽瀧が整理を行っている。羽瀧一代(2008)「情熱的恋愛と規範的恋愛」羽瀧一代編『どこか<問題化>される若者たち』恒星社厚生閣, pp. 163-181, を参照。
- 18) 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ(2006.9)「第13回出生動向基本調査(結婚と出産に関する調査—夫婦調査の結果概要—)」, 前掲 URL を参照。
- 19) 山田, 前掲書, pp. 122-124。
- 20) 山田昌弘・白河桃子(2008)『「婚活」時代』ディスカバー21。
- 21) 内閣府ホームページ「第8回世界青年意識調査」<<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/pdf/gaiyou.pdf>>, 2009年3月作成, 2010年9月7日参照。
- 22) 日本性教育協会編(2007), 前掲書「付表・II」, p. 204を参照。
- 23) 交際における男女の関係性に関する実証分析については, 片瀬一男(2007)「青少年の生活環境と性行動の変容—生活構造の多チャンネル化のなかで—」日本性教育協会編(2007), 前掲書, pp. 36-38, を参照。
- 24) Goodson らは過去20年間の38の文献について, セルフ・エスティームと性行動に関する実証的研究のレビューを行っている。Goodson, P., Buhi, E. R. et al. (2006) "Self-esteem and Adolescent Sexual Behaviors, Attitudes, and Intentions: a Systematic Review" Journal of Adolescent Health 38(3), pp. 310-319, を参照。
- 25) 塩谷芳也(印刷中)「高校生の性行動とセルフ・エスティーム」『社会学研究』88,

東北社会学研究会。

- 26) 日本性教育協会編(2001)「付表・Ⅱ」『「若者の性」白書－第5回青少年の性行動全国調査報告－』小学館，p. 200，を参照。
- 27) 日本性教育協会編(2007)，前掲書「付表・Ⅱ」，p. 212，を参照。
- 28) 総務省統計局ホームページ「国勢調査e-ガイドー配偶関係」<<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kouhou/useful/u14.htm>>，2010年9月8日参照。
- 29) 関西地方の複数の大学で1992年～2007年に実施された片桐の学生調査においても，2002年以降，出席状況が良好になっている。またその行動変化の最大の理由は，大学教育自体の変貌にあると考察されている。片桐新自(2009)『不安定社会の中の若者たち』世界思想社，pp. 27-29。
- 30) 最近の恋愛意識における性差を扱っている研究として，水野(2007)では男性の方が恋愛にのめり込みやすいとしているが，高坂(2009)では「生活習慣の乱れ」は女子の方が強く感じているという知見を得ている。恋愛の学業・その他の行動面への影響の性差については，片瀬(2007)はマイナスの効果を，Giordano(2008)は学業達成へのプラス効果を指摘している。片瀬(2007)，前掲論文；Giordano, P. C. , Phelps, K. D. , et. al. (2008) "Adolescent Academic Achievement and Romantic Relationships" Social Science Research, 37(1), pp. 37-54；高坂康雅(2009)「恋愛関係が大学生に及ぼす影響と交際期間，関係認知との関連」『パーソナリティ研究』17(2)，日本パーソナリティ心理学会，pp. 144-156；水野邦夫(2007)「恋愛心理尺度の作成と恋愛傾向の特徴に関する研究：Leeの理論をもとに」『聖泉論叢』14，pp. 35-52，聖泉大学，を参照。
- 31) 渡辺(2000)，前掲論文，p. 177。